横浜医学，66，597-604（2015）

総説（平成26年度横浜市立大学医学研究奨励賞受賞研究）

胃癌治療における補助療法の現状と課題

青　山　　徹

神奈川県立がんセンター　消化器外科・横浜市立大学医学部　外科治療学

要　旨：胃癌治療で手術は，唯一根治が期待できる治療方法である．手術手技の確立や，周術期管理の進歩に伴い胃癌治療の成績は向上してきたが，手術だけでは治成績の改善には限界がある．この原因としては，手術時にすでに存在する微小転移による腹膜播種や遠隔転移などの術後再発が挙げられる．このような微小遺残腫瘍による再発予防を目的として行われる化学療法や放射線治療が補助療法である．1950年代半ばに5-FUが発明され，1960年代以降胃癌に対する補助化学療法の臨床試験が行われ，その後1980年代ごろから術後補助化学療法を試験治療群，手術単独群を対症群とした無作為比較試験が行われてきた．ごく少数の比較的小規模な試験では術後補助化学療法の有用性が得られているものの，殆どの試験では手術単独群との間に統計学的に有意な差を証明できなかった．2000年以降，日本および海外で，科学的に妥当な統計的仮説と十分なサンプルサイズに基づくPhase III試験が次々と施行され，米国・欧州・日本の順で異なる標準（それぞれ術後補助化学放射線・術前後補助化学・術後補助化学療法）のエビデンスが報告された．本総説では，切除可能胃癌に対する補助療法の成り立ち，現状，今後の展望を解説する．

Key words:　胃癌（gastric cancer），手術（gastrectomy），補助療法（adjuvant treatment），化学療法（chemotherapy），放射線治療（radiation therapy）